

会 議 録

会議の名称	平成24年度 第2回豊中市図書館協議会		
開催日時	平成24年(2012年)9月11日(火)18時~20時		
開催場所	豊中市立岡町図書館 集会室	公開の可否	可・不可・一部不可
事務局	生涯学習推進部 岡町図書館	傍聴者数	5人
公開しなかった理由			
出席者	委員	大野 俊介 寺本 幸子 松田 美和子 島野 昌子 鵜川 まき 曾谷 昌 中川 幾郎 塩見 昇 村上 泰子	
	事務局	生涯学習推進部長 生涯学習推進部次長 岡町図書館長 千里図書館長 野畑図書館長 庄内図書館長 岡町図書館主幹 岡町図書館副館長 高川図書館長 岡町図書館副主幹 岡町図書館主査 千里図書館主査 野畑図書館司書	
	その他		
議題	<ol style="list-style-type: none"> 1. 豊中市立図書館の今後のあり方(グランドデザイン)案について 2. 平成23年度の豊中市の図書館活動について 3. その他 		
審議等の概要 (主な発言要旨)	別紙のとおり		

平成24年度（2012年度）図書館協議会

日時：平成24年（2012年）9月11日（火）18時～20時

場所：豊中市立岡町図書館 3階集会室

出席者：（敬称略）

委員 大野 寺本 松田 曾谷 島野 鶴川 中川(委員長) 塩見 村上
事務局 羽間 山羽 堀野 山本 大原 北風 木村 江口 内田 中田 前川 小堀
石田 上杉 磯上 西口 松井

開会

資料確認

委員交代の紹介

委員（欠席者）の紹介

●委員長

皆さん、こんばんは。

最初に図書館協議会の運営方法について委員の皆様について、ご了承いただきたい。豊中市の図書館協議会は原則的に会議を公開しており、本日も5名の傍聴者が来られている。

傍聴の定員は10人となっているが、希望者が定員を超えた場合には、傍聴していただく人数については、そのときの状況を見ながら私の判断にまかせていただくということで従来からご了承いただいているが、そのようなやり方でよろしいか。なお、傍聴の方にはアンケートをお願いしており、傍聴されてのご意見等を伺い、お伝えすべき内容はご報告申し上げます。

次に前回の会議録について、事前に送付させていただいたものについて特に委員の皆さんから修正等の意見はなかった。公開の際には概要という形で個人名は掲載せず、委員と表記するのでご了承いただきたい。

それでは議題1ということで、「豊中市図書館の今後のあり方（グランドデザイン案）について事務局から説明をしていただきたい。

●事務局

はじめにグランドデザイン作成の経緯について申し上げます。

豊中市立図書館では、これまで社会経済情勢の変化や市民ニーズの多様化、また極めて厳しい財政状況のもと、図書館業務の改善・集中化、図書館サービスエリアの見直し、学校図書館と公共図書館の連携などにおいて検討すべき課題を明確にしてきた。行財政改革の進捗中、人員の縮減や施設配置の見直し等も含め、より効率的な運営が求められている。選択と集中の時代にあって、事業のあるべき姿の明示が求められており、グランドデザインは今後5年～10年の図書館の目指すべき方向性を、図書館の現場からの提案として示したものである。

作成に当たっては、若い世代で構成したプロジェクトチームの中で、館長会素案をふまえて議論

を重ねてきた。全体職員会議等の場を通じて全職員からの意見集約をし、それも可能な限り反映させたものである。

柔軟な発想で市民にとって必要なサービスは何か、それを達成するにはどうすればいいかを議論してきた。また、重要な視点として人材育成についても取り上げている。

5ページ以下グランドデザイン28の具体的な戦略については、現時点で考えられる施策を例示としてあげている。今後の状況に応じて取捨選択や修正をしながら柔軟に見直し実施するものと考えている。図書館のめざすべき方向性についてご議論いただきたい。

(グランドデザインチームのチーフより、パワーポイントによる説明)

これから「豊中市立図書館グランドデザイン案」についてご説明させていただきます。先日お送りしたグランドデザインチームが作成した「豊中市立図書館グランドデザイン(案)」について、本日は特に2ページ後半から4ページの、「これからの豊中市立図書館」の「1. 図書館のめざす姿」と「3. グランドデザインの4つの目標」について、広い視野から委員の皆様にご意見をいただければと考えている。なお、5章の戦略の部分についてはチームで話し合っ出したもので、現段階ではこのような事業を行うことができると考えているが、今後の状況によって、柔軟に変更できるものと考えている。

豊中市の現状を見ると、10年後の人口が31万5千人になるとの予測があるが、生活基盤の整備と自律した町づくりによって急激な人口減をくい止め、平成32年の人口を35万人とすることを市の施策の方向となる後期基本計画では想定している。また、少子高齢化は府や国の平均を上回る速度で進行している。平成22年度の国勢調査によると、20代後半の失業率が生産年齢人口中で最も高くなっているなど、若年者就労問題もかかえている。さらに社会情勢の変化によって、財政状況は厳しい状況にあるが、公共サービスの利用は増えている。市全体として資源の再配分が必要であり、今以上に効果的、効率的な市政運営が求められている状況である。

お手元資料の2ページにあるように、平成23年度の市民意識調査では、市民は生涯学習や特色ある地域づくりを重要だと考え、施策の現状にもおおむね満足しているという結果が出ている。また、社会参加や生きがいづくりの意欲はあるが、実現はできていないようだ。図書館の役割として、これまでは市民一人ひとりの学びを支え、生涯学習の機会を保障してきたが、さらにこれからは市民が学び発信する環境を整えることで、知識や経験を地域に還元できる場になり、学びの環境を支え、「学びの循環」を支える拠点となる。「学びの循環」とは、豊中市教育振興計画に出てくる言葉ですが、図書館をとりまく学びの循環として、このような図式を考えている。図書館が持つ知識や地域の資産を活かし、市民団体や関連団体などと連携しながら、暮らしの課題や地域の課題の解決のために、市民のライフステージに合わせた事業を行うことで、「学びの循環」を手助けし、結果として市民と地域が活性化し、豊中市がずっと住み続けたい町になることに貢献したいと思っている。

「学びの循環」を支えるための図書館の今後の方向性は、大きく二つある。

ひとつは最初に言ったように、市の全体的な課題に対応した事業に重点をおくことである。

そのためには市の状況の詳しい分析や、世代ごとにサービス対象をトータルで考える組織改革が必要になる。もう1つは地域課題に対応し、特色ある図書館づくりを行うことである。現在すでに北摂アーカイブス事業や庄内REKなど協働の実績がある。これからは、市民とともに情報を集め編集し発信する役割をさらに強めていきたい。そのために「(仮称)地域連携司書」を配置し、積極的に地域に出かけて

資源を掘り起こして情報をフィードバックし、それぞれの図書館に地域の特色を還元させていく。

こうした新しい役割を持った豊中市立図書館のキャッチフレーズを「まち、ひと、つながる、好“寄”心の駅ーあなたのこれからと地域の未来を応援します」とした。「好“寄”心」とは、市民の好奇心に応えるという本来の意味合いのとおり、人や情報が図書館で好んで寄り合っしてほしい、市民の心が好きなものに寄ってほしいという意味合いを持たせた造語である。また、駅というのは、人と情報の行きかう電車の駅というだけでなく、地域の価値を再発見し、地域を活性化させた道の駅のように、市民が自分たちの持っているものの価値に気づき、生きがいを見いだせる場所、情報の発信源ともなるにぎやかな場所をイメージしている。このときに重要なポイントとなる組織としての姿勢が「待ち(まち)から地域(まち)へ、ここからあらゆる所へ」ということである。つまり、図書館のカウンターで市民を待っているだけではなく、これまで以上に司書がカウンターの外に出て、図書館の外に出て、地域と人、人と人、人と情報をつないでいきたいということである。

新しい豊中市立図書館の今後10年の目標を四つ掲げた。まず一つ目としては、ICタグを活用したセルフ貸出や電子書籍や音楽発信サービスを導入するなど、最新の情報通信技術を導入することで図書館利用の利便性を向上させ、多様な情報を提供する。

二つ目としては、先ほどもお話ししたが、(仮称)地域連携司書の配置によって地域の情報を集め、また市民団体や市の部局などと連携を深め、最短距離での課題解決を図る。特に子育てや就業支援などによる、若年層の支援やシニア世代・リタイア世代の知識や経験を、地域に還元するしくみづくりに重点を置く。三つ目は、図書館評価の一環で行う市民アンケートの結果をもとに、市民の利便性や地域課題に応じた施設配置や、館ごとにさらに地域の特色を反映させたサービスをしていく。4つ目は、「とよなかブックプラネット事業」の学校図書館の環境整備をふまえ、さらに(仮称)学校図書館支援コーディネーターを配置することで、生涯学習の基盤づくりを担う学校図書館との連携を強化する。

目標達成の一つの指標として、図書館登録率を現在の40%から20%上げて60%台にしたいと考えている。豊中市民の60%が図書館に登録していただければ、図書館が市民に認知された施設であり、一定の評価をいただけたと考える。

新しい豊中市立図書館を担う職員、特に常勤職員には三つの役割が求められています。

まず、①企画立案：市民ニーズや地域課題・社会情勢を調べてサービスを企画立案する。②情報分析：長期的な視点で地域が必要とする資料や情報を編集し、提供発信する。③コーディネート：資料や情報の案内人として、人と人、人と情報、人と地域をつなぎ、地域の活性化に貢献していく。

先ほどの四つの目標を達成するために、重点的に取り組む事業を定めた。内容につきましては、資料の5ページ目以降をご覧ください。これらの戦略は、最初に申したように、現地点ではこのような事業が可能ではないかと考えているが、市民のニーズや市の施策など、その時々状況に応じて柔軟に見直ししながら、優先順位をつけて実行していくものとなっている。

図書館が変わることで、市民が豊かに学び、互いにつながって活力あふれる個性的、自律的なまち、豊かな市民力があるまち、総合性あふれるまちとなり、住み続けたい愛着のあるまちとなるようにしたい。

●委員長

これでペーパー版も見たということではないか。

●事務局

はい。大枠としては今の説明内容の通りだが、一点修正がある。グランドデザイン案を送付した後、教育委員会内部でも議論しており、4ページの③「市民の利便性や地域課題に対応した施設の配置と運営をめざす」の、3番目「就労支援や子育て支援など特色ある図書館を整備する。」を、「就労支援や子育て支援など特色ある図書館づくりを含め、分館のあり方を検討します。」という文言に修正していただきたい。

●委員長

今、説明されたことについて、順次議員のみなさんからご意見・ご発言をいただきたい。ご発言の際は必ず挙手いただき、指名を受けマイクを取って記録がとれるようにご発言ください。どなたからでも結構だが、挙手がなければ順番にどうぞ。

何回発言していただいても結構ですので、一回あたり2・3分程度でお願いしたい。他の方のご意見を聞くと、また違った角度からのひらめきや気づきもあると思う。

●委員

この8ページにわたるグランドデザインを何回か読み直した。たくさん質問があるので、それを2・3分でというのはとても難しい。たぶん若い職員の方が一生懸命考えられ、これからの方向性をどうしていくかというのを苦心された結果だと受け止めたが、期待するとともに、大丈夫かなあと、いろんな側面で不安な部分があると感じた。

一番気になるところは担い手のことだが、これから求められる図書館常勤職員ということで、資料を見ると半分は常勤職員ではない状態で、グランドデザインのように進めると常勤の人にどれだけ負担がかかるのか、そのへんがとても心配であることと、企画立案等さまざまな資質が求められているが、これは当然今までだって求められていたはずなので、改めて出されるとなんだか市民としてはがくっとくる。もっと早くからこういう問題は考えられなければならなかったのではないかな、というのがあらかたの感想で、細かいところはこれから出していく。

●委員

読ませていただいたが、あまりにも難しくよくわからない。人材を育てるとか、職員の資質を育てるとか、ちょっと理解しにくいところがたくさんあって、わからない。

●委員

全体として豊中市立図書館のグランドデザインという、未来を明るく展望する文章であるはずにもかかわらず、少しトーンが窮屈というか、しんどい感じを受けるので、もう少し前向きなトーンにならないかなと感じる。それともう一点は豊中市立図書館のめざす姿の中で、少し豊中市の中だけに閉じている印象があるので、もう少し外部との連携というところが入ってくるべきなのではないか。

●委員

グランドデザインの四つの目標というところで、最初に情報通信技術の導入・利便性の向上が掲げられている。その利便性の向上の結果、どういうところが目標とされるのかが見えにくいと感じた。それから、例えばここに書かれているセルフ貸出というところで、I Cタグ導入というところでも費用的にも小さいものではないと思う。それだけのものを導入して、どれだけ効果が期待できるのかというところが、ちょっと見えにくいと思う。例えば経営資源戦略のところにも、業務の見直し省力化・効率化とI Cタグ導入によるカウンターワークの省力化を行うと書かれているが、ただ単に省力化を行うだけで済むというのではもったいないのではないか。それが例えば人件費の削減まで踏み込むというか、あるいは資産の目減りを防止するとか、そういうところまで踏み込んだ書き方をさせていただくと、多額の費用投入に伴う効果がみられるのかなという印象を持った。

●委員

社会のいろんなニーズに合わせて、幼稚園においてもいろんなことに取り組んでいる。今の説明を聞き図書館でもいろんなことに取り組んでいるのだと思った、というのが率直なところである。キャッチフレーズについては、分かりやすく、ここまで考えるのには時間がかかっただろう、すばらしいと思う反面、具体的にいつどのようなかたちで実現されていくか、というところが気になる。やはり本当に実現していくためには、もう少し具体的な話もこれから先聞けたらいいなと感じながら聞いた。

●委員

二点指摘したい。まず一点は、もちろんこれはどこでも矛盾が生じることだが、先ほど他の委員が指摘されたように、利便性の問題と、一方で「待ちから地域（まち）へ」、地域に積極的に出ていくということと、セルフ貸出をやるということがどこかで矛盾しているということ。一般に、最近は本当にコンビニでも店員さんとほとんど会話をかわすことがなく、自分が品物をもって行ってレジでお金を払うだけで、なかなかお互い話をするのがないなかで、本を選ぶなり自分がほしい資料を選ぶときに、本当にセルフ貸出というのが図書館の機能として有用なのかと思う。非常に難しい問題だと思う。一方で利便性や、経費節減という問題を抱えている中で、人を増やしたりすることは、なかなか難しいと思うが、一方で地域で連携して行って、子育て世代やシニアの人にできるだけ図書館を利用してもらうような方策といいながら、窓口ではセルフ化を進めるというところが私の中ではひっかかっている。

それからもう一点は、学校現場もそうだが、今どんどん新しい人たちが増えてきている。本当にここ数年で半分くらいのメンバーが入れ変わっていくだろうというなかで、先ほども出ていたが、資質向上のための方策、学校の場合では初任者は初任者研修があり、計画的に一年間かけて現場でOJTというか現場でも育てながら、一方でいろいろな場所にも行って研修していくというように、様変わりをしているのだが、そういったことが図書館の職員の資質向上では、どういう形でできるのか、一方で現場が動きながらいろんなところに出かけていく、例えば他の地域の図書館に出かけていくというのも非常にいいだろうと思うが、そういったことが可能なかどうか。資質向上のための方策というのがもう少し具体的に出てきたら、確かに図書館としても機能していくだろうと分かるのではないかと感じた。

●委員

私も、セルフ貸出というところのイメージ自体は湧くけれども、セルフ貸出とかI Cタグとか、そう

いう技術は日々向上していくので、それに対するニーズは増えていくと思うが、利便性ばかりを求めているとだんだんと体温がなくなっていくのではないかと。人の温かみというのやはり地域の持っている大切な要素なのではないかと思う。技術の向上とか利便性というのをあまり押し進めすぎると、やはりそれに取り残されてしまう人が絶対出てくるし、体温が感じられるようなそんな図書館であるということも非常に大切だと思うので、技術重視も大切だけれども、それをカバーするための人の温かみを感じるような場面もどんどん作っていただければと思う。

それと言葉の点で気になったのだが、ここでは造語を使っておられる。このキャッチフレーズがわかりやすいという意見もあったけれど、私はわかりにくいと思った。「心の駅」といわれても、はっきりわからない。キャッチフレーズって本当に必要なのだろうか。元にもどってしまうが、やはりキャッチフレーズはこの言葉で妥当なのか。私の中ではもやもやと考えてしまうところだ。それと、戦略・戦略・戦略と書いてあるが、そんなに戦わなくてもいいのではないかと。すごく神経質でとげとげしたイメージをこの報告書からは受けてしまう。計画ぐらいでいいのではないかと。あまりに目的意識が強すぎて、それが本当に実現可能かというところで、クリアしなければいけない課題が大変多くあるわけで、戦略という言葉はどうかと、少し考えるところがあった。

●委員

職員の総力をあげてまとめたという話だが、乱れのない目標を持つという取組をされたことは高く評価をすべきだと思う。少なくとも、「これはやるのだ」という、そういう思いがここに出ていると思う。そのへんを期待したいと思う。今、市全体がどうなっているだろうということと、総体としてのまちづくりの方向性みたいなものを意識しながら作ったということだろうと思う。そういう意味では、豊中のマスタープラン、とりわけ教育の世界では教育振興計画をつくっている。そのときにもお話ししたが、そういうプランの中に図書館がどう参加していくのか、そういうプランの中に、図書館がこれからしますということだけでなく、そうした総体としての豊中市のまちづくりのプランや教育振興計画の中に、これまでのプロセスの中で図書館がこれまでどう関わってきたのか、そしてさらにそれに何を加えていくのかという側面が、より出てくる必要があるのではないかと。とりわけ教育進行計画との関係、さっきの説明の中にもあったように、生涯学習というのが基本的な基礎概念でしょうから、豊中の図書館が市民の生涯学習の能力の向上・形成ということにどう関わっているか、さらにどういう部分で関わっていくのか、というところをひとつのアピールとして世に出していくのも良いのではないかと。思う。

みなさんのお話の中にあつたように、外へ出ていく司書の話だとか、能動的に、積極的に情報を集めるという側面が強調されるわけだが、やっぱり図書館において市民のニーズなり思いを受けとめる所は日常の図書館のカウンターであるから、そういう意味では、先ほどの委員がおっしゃったように、確かにそこを意識化して市民の思いをきちっと受け止めるということは、やはり矛盾といえば矛盾だろうと思う。そういうICタグの導入によって省力化できるところは省力化していくということ。それはそれで一つの受け入れ方針だろうが、やはり図書館に一番大事な市民との接点として、これまで果たしてきた部分をどうするのか。出かける司書と言うが、ただ出かけりゃ何かが手に入るわけではないので、このところは言葉のあやの問題ではなく、やはり非常に基本的な問題として、図書館経営の、あるいは職員のありようの根幹につながっていくところだと思う。より能動的に、外へという気持ちが多いに伝わる。図書館が情報の、資料の好奇心の駅になるということは、言葉のあやの問題ではなしに、具体的

に何によってそうなのかというところを、より詰めていくことが必要だろうと思う。今後に大いに期待したいと思うが、最終的にどなたかがおっしゃったとおり、不安も感じるという部分がなくはないと思う。

●委員長

私も一員として発言すると、拝見したかぎりにおいて、豊中の図書館は図書館評価システムをつくるまでの長い歴史の中で、館内の職員の英知を集めるシステムが出来上がってきているんだなと思った。これは、若い職員を中心としつつ、館長グループがそれを受けとめて精査するようなやり方をされたということだが、内容的にはかなり良い。かなりのレベルではないかと受け止めた。語呂の問題とか重さ軽さ優先順位などの問題はあるだろうが、それは置くとして、一応すべての問題意識はここに出しきったのではないかなと思う。

第二ラウンドに入るが、もう少し辛口の意見を出していただいてもよいと思う。

●委員

言い残したというわけではないが、これはあくまでも方針ということだが、もう少し具体的なことを聞いてみたいと思う。例えば、電子書籍の導入をすると一行で書いているが、非常にたくさんの検討をしなければいけない。そこはどういうふうクリアしていくのか、ビジョンを聞いたかったとか、そういう思いがある。

●委員

先ほどの疑問に加えて、グランドデザインの四つの目標の④について指摘したい。学校の教師としては、やはり「とよなかブックプラネット事業」に関心を持っているが、本当にこの事業に力を入れて動いてくれていると思う。学校図書館の本にも、バーコードがほとんど貼られた。非常に苦勞しながら、バーコードを蔵書に貼り、共通の資産として使っていくことに向けて進んでいる。しかし、ここに書かれている「学校図書館支援コーディネーター」のイメージがもうひとつ湧かなかった。具体的にどう動くかをされるのか、お聞きしたいと思う。本当に前回にも申し上げたとおり、学校の図書館に司書がいるだけで学校図書館の動きが変わってくる。一方で、学校には必ず司書教諭という、学校司書と教師をつないでいく役割を果たす教諭がいるのだが、そのへんの動きがまだまだできていないという話を前回させていただいた。そこと「学校図書館支援コーディネーター」がどういうふうにからんでくるのか、大変興味があるのでぜひお聞きしたい。

●事務局

「とよなかブックプラネット事業」によって、学校図書館を活用するための環境整備が今年で完了する。その後次年度以降、その環境を十分発揮させるのは、人の力だと考えている。そのためには、豊中では全校に司書が配置されており、学校図書館教育の充実に尽力されている。この学校図書館専任職員、いわゆる学校司書をこれまで以上にバックアップするために、読書振興課にも兼任ながらそのような職員がいるが、読書振興課に学校図書館支援に特化した人員を配置したいと考えている。現在も公共図書館の司書が、毎月実施されている連絡会の調整や、研修の実施などを担当しているが、「学校図書館支援

コーディネーター」はその役割を引き継ぎ、全校の図書館を定期的に巡回して、図書館専任職員の日々のサポートを行っていきたいと考えており、公共図書館の担当者とも今まで以上に連携を密にして、教育推進室とも連携を深めることが大きな役割になると考えている。以上のようなイメージである。

●委員

では電子書籍についても、どんなビジョンをお持ちなのか、少しお聞かせいただきたい。

●事務局

まだ具体的に電子書籍をどう導入していくかという年次計画はないが、基本的に図書館システムとの整合性をまず重視することと、それと電子書籍がまだ黎明期といいますか、少し今年から動き始めたところかなということで、制度的にはまだしっかりしていないところもあると思う。そこで、豊中単体で考える方向よりは、コンソーシアムというか近隣の自治体間で連携しながら、スケールメリットでコスト削減をはかりながら実現を目指すよう、研究を重ねていきたいと考えている。

●委員

私は教育現場にいることから、ここの中で子育て支援や保育士等との連携を、どのように進めていくのか具体的に聞くことができれば、こちらのほうも公立幼稚園として連携がとれるかな、というところに興味がある。具体的にはこれから先進んでいくのかと思うが、聞かせていただければと思う。それから先ほど委員が言われたとおり、どのように実現していくのかというところに関心をもっている。私も実現したら素晴らしいだろうとは思いますが、これだけのことが新たに導入されるということは、すごく大変だろうと思いながら見た。私としては子育て支援のところに強い関心を持っている。

●委員

やはり、先ほどのICタグ導入というのが気になるので、訊ねたいのだが、ほかの自治体ですでに導入されているところがあるのかどうか。あるのであれば、どういう効果が見えているのか聞きたい。

●事務局

近隣の自治体では、高槻市が2・3年前に、箕面市が今年導入された。その他の案件で申し上げる予定にしていたことを申し上げる。ただ今は本会議の議決を経っていないので、まだ決定事項ではないとご承知おきいただきたいが、重点分野雇用創造事業として全額国庫補助によるICタグの貼付とエンコード作業の補正予算が、昨日の文教委員会で承認されたので、ICタグ・エンコード・データ入力については、少しだけ方向性が出てきたかな、というのが豊中の状況である。

また、ICタグの効果については、ICタグを貼りICゲートつまり無断持ち出し防止装置をつけることによって、現在は千里で検証しているところだが、いわゆる亡失効果が期待できる。また、図書館システムとの整合性の絡みも考慮すべき点としてあるものの、自動貸出装置あるいは自動返却装置によって、図書館職員と対面せずに用を足すことが可能となる。そういう意味では、自分が今何を借りているか、プライバシー上でのメリットも期待できるとも言えるが、先ほども話に出たように、カウンターで話すことを必要としないということから、人の温かみという部分では少し問題もあるかとも思う。

けれども、導入による省力化によって、フロアにいろんな人員を配置して、グランドデザイン案の8Pにも書いているように、いわゆるカウンターからフロアへ、より細やかな接客を行う方向へ、温かみのある図書館をフロア全体で作り出そうという方向性を示している。基本的に省力化のメリットもあるので、それを資源の最適化というか、人的資源の再配置といいますか、そのあたりで「(仮称)地域連携司書」、あるいは「学校図書館支援コーディネーター」を考えている。

●委員

先ほど千里のほうで先に導入していて、それが亡失効果につながっていると聞いたが、それはICタグか。

●事務局

ICタグを貼っている。亡失図書が全般的に多いということから、本当に亡失効果があるか検証・実証するために、千里図書館のリニューアル時、平成20年の2月に実験的に導入して4年ほど状況を見てきたが、亡失効果がある程度以上見込めるという数字が出た。

●委員

今はもう資料にICタグを貼っているのか。

●事務局

全部ではないが、千里図書館の蔵書の一部には貼っている。

●委員

質問が「グランドデザイン」の四つの目標の内の1番に集中しているが、この1番が他の目標に比べると、目標というよりもむしろ手段という印象が強いというのが、皆さんが違和感を持っておられる大きな原因なのではないかと思う。好むと好まざるに関わらず、これから5年・10年先を考えると電子情報がますます増加していくことは間違いない。新聞にしても書籍にしても、雑誌にしても電子的な形態でないと手に入らないといった情報が確実に増えていくと思う。そういった情報を私たちが紙の図書や雑誌などで入手しているのと同じように、みんなが入手できる、アクセスできることを、いかにして実現するかということが、目標としては重要な部分なのではないかという気がする。そのために、例えば電子書籍の配信などを導入することが、手段としてあって良いと思うのだが、これをバンと目標としてあげるということには違和感があるという気がした。セルフの貸出・返却・予約・受取りは、利便性の向上ということなので、電子書籍や音楽をデジタルで配信というのは、また別の次元の問題であるように思う。二つを1番のところと一緒に入れるというのはどうなのかという印象を受ける。

それから4Pに数値目標というのがあるが、この数値目標の中で、20代から30代と60代に重点を置くことが書かれている。このことは、この世代の利用率が今一つ少ないからということが理由だと思うが、利用を増やすときに、今少ない20代・30代と60代をかさ上げするということと、先ほど言った四つの目標とがどういう関係にあるのかというのが、この文章の中からはずっと読み取れない。目標の中には子どもの学びの目標もあり、20代から30代と60代の重点の部分と、違う部分が当然

入っているわけですので、数値目標として20代から30代と60代において全体として登録率を20%上げるという時に、特にどの部分をやっていくことで、登録率を上げていこうと考えているのか、わかりにくいような気がした。

●委員

8Pに「集会室利用を活性化する」とあるが、たぶんこれは私の理解として、図書館を利用してもらう頻度を高めるという意味でよろしいか。そういう利用をしてもらうということについては、人を呼び込むということじゃないかと思う。要するに人を呼び込むためには、集会室でいろいろな催しものをする。私は地域でお年寄りを対象に健康教室などをやっているが、お年寄りをいかに呼び込むかということは、地域、豊中市に関する減量推進課とか、保健所および健康に関することなど、そういうことを講演していただいて、お年寄りに来られませんかと呼び込んでいる。来られる方は、始めは少なかったが、口コミで「あなたが行くのだったら行ってみようか」というように、だんだん人が増えてきた。ですから図書館に人を呼び込むためには、そういう講演などをされてはどうかと考える。

40%から20%上げるためには、お年寄りに本に親しんでもらえるよう、目のせいでメモをとることや読書がしにくくなり、本も読みたくないとおっしゃることがあるが、本を読まれなくても耳から聞いていただくような感じで、講演会とかを積極的に開いたらどうか。

●委員

ちょっとページがとぶかもしれないが、まず、3Pのキャッチフレーズ「まち、ひと、つながる 好“寄”心の駅」について。図書館に人と情報が行きかい、にぎやかな場所、市民が行きかう場所にしたいというキャッチフレーズと、さっき出た8Pのカウンターからフロアワークにシフトするということについて。具体的にフロアに職員が歩いていたりとしても、そこにいけば必ず質問できる人がいるということとは全然違うと思う。例えば家の中でも、家族がいるべき定席というようなものがあるが、仕事をしていてもそこへ戻る所があるということはとても大事なことだ。なんか浮遊しているようにずっと歩いていて、戻る所がなくて、それで大丈夫かなと思う。図書館で一番大切な、そこへ行けば必ず人がいる、司書に質問できるという安心感がない所になるのではないか。そちらの危険性の方が高いのではないか。事実、箕面市はそういうふうなシフトになっているというふうに聞いたが、市民の評判はあまりよくないと聞いている。

よほど慎重に、例えばフロアワークが大事だと思うのなら、カウンターと半々にするとか、そういうふうによく考えてやってもらいたい。すごく危険だと思う。好奇心で人が寄ってくるのに、どこに寄ったらいいのかわからないというような図書館になっていいのかというのがまず一つ。それから4Pで、今は庄内幸町図書館に学校図書館支援ライブラリーがあるが、それが蛍池図書館に将来移るというふうを受け取ればいいのか。それと「学校図書館支援コーディネーター」というのは、人とライブラリーがどのようなつながりをもって実現されるのかということが、具体的ではないので気になる。やはり「学校図書館支援コーディネーター」は人が要であり、今脚光を浴びている島根の出雲町の場合を見ても、一人のコーディネーターがいて、彼女の働きがすごい。やはりやる気のある人がどれぐらい、何人配置されて実際にコーディネートしていくのか。言葉ではなく実体を伴ったものとして考えていかないといけない。ライブラリーとコーディネートしている所が、別々に動くようでは困るという問題がある。統

一性をもって、人と場所と機能をきちっとまとめて考えていただきたい。

それから4 Pにある、南部コラボ構想で果たす図書館の役割とその構想について、具体的にお話し願いたい。

それから同じ4 Pで、子どもたちが生涯にわたって学ぶ基礎づくりを支えるという表現があるが、これはすごくおかしいのではないかと思う。というのは、「とよなかブックプラネット事業」で、学校教育の側よりも、市立図書館の方から館長をはじめすごく大事な役割を果たす方々が、読書振興課に行っている。だから基礎づくりそのものについてもっと主体的な書き方でないといけないと思うが、基礎づくりを支える立場でいいのかということ。そのへんの言葉の問題として、ここはきちっと基礎づくりをするのだという意志を表現するのではないかとおかしいのではないかと思う。

それから「外へ出ていく」ということと、「好“寄”心の駅」っていうところを、どう統合していくかというところ。私自身は、まさに豊中駅にある市民活動情報サロンを受託している団体の理事をしているが、市民活動の中間支援組織と言われているが、それでも地域とのネットワークを作るのに10年以上かかった。それでもまだ十分とは思えないところもある。それほど地域を本当に知って、そこで何が行われているかを把握してやっていくのは、相手のあることなので大変だ。これはどのように外へ出ていくかということを相当真剣に考えていただかないと、言葉だけ浮いてしまって、図書館の中についてもなんとなくよくわからない、外についてもよくわからない、中途半端な職員がウロウロする状況になったら大変なことだ。もっと真剣に考えていただかないといけない。すごく不安を感じる。

また、あくまでも図書館の使命と理念というのは明確にあるわけで、豊中市立図書館の基本目標というものがある。それに基づいて、図書館経営を語り、外に行くなら、それに基づいて行ってもらわないといけない。行政として予算がなく大変だから、図書館がいろいろ役割を果たさなければならない、何で果たすか、どこを基準にして果たすかということも、もっとちゃんと持っておかないと、何もかもが中途半端になってしまうのではないか。エールも込めて、もう少しそのへんを整理していただきたいと思う。

最後にもう一点、8 Pの「⑩ ICTを活用した高水準のサービスを提供する」ですが、サービスに高水準・低水準があるのかなという疑問を持つ。やっぱりどの資料も平等でなければいけない、何かITとか何か、そういう電子機器やらそういうものを使うことが高水準ということではないのだから、そのへんが何かあいまいになっていないかと気になった。

●委員

先ほどキャッチフレーズが話題になったが、そこに3 Pの枠下、人や情報が図書館で「好んで寄り合」ってほしいという、大変情緒的な表現がある。好んで寄り合って欲しいという願望がある。いろんな情報が集まってくるというのは、情報自身が図書館に寄ってくるということ自ら望む。ということは、どういうふうにしたらそうなるのかという期待・願望と、それからそのための具体的な手だてがどういうことか、まだ書けていないと思う。それはこれから書いていくということだろうが。図書館は、確かにこれからいろいろな市民の抱えている様々な課題に役立つようになっていきたい。そのための資料なり情報が図書館にはあるのですよ、という状況を図書館に作っていかうとしていることは確かだけれども、なんでもかんでも図書館になければならないということではない。むしろ地域の人たちの暮らしに関わるようないろんな情報ってというのは、それこそいろんな所にある。そういうものを、情報の情

報化というか、情報素材、情報のありようみたいなものを、やはり図書館として出かけるということ、あるいは能動的な働きを含めて、図書館自身がどう作っていくのか、そして全てが図書館に片付くわけではない。しかし市民にとって必要な時には豊中あるいは市外を含めて、どこにどんな情報があるのか、どういうものが使えるのかということ、適切に案内ができアクセスができるような手立てを作っていく、そういうふうなことがやはり基本的には必要なことなのだろうと思う。

そういうような状況をどのようにして作っていくか。一つ私自身評価をしたいと思うのは、北摂アーカイブスでは、現にそういう事業を豊中ではやってきていると思う。人が参加しながら、その人自身がいろいろな情報を持って集まって来てくれている。それが人と人の中で共有されている。つながっていくような関係が、やはり図書館には一番なじむことだろうと思う。いろいろな情報源につながっている人たちが加わりつつ、図書館自体はナビゲーション機能や方向付け案内をする、人々に特別な機関として意識されるようなあり方が作られていけばよいのではないかな。

そのためには図書館が基本的にどのようにあることが必要か。期待するイメージと、そうなっていくように寄りあって欲しい、という部分をどう具体化するか、そこを丁寧に追及していくことが必要なのだろうと思う。

それから皆さんもすでにご承知だと思うが、新しくできた図書館法の中で、図書館の望ましいあり方、管理運営上の望ましい基準、ちょうど文科省が案を出して意見聴取しているところである。まあ、そう驚くようなことが書いてあるわけではないが、今までは公立図書館のためのものだったが、今度は私立図書館も含めて、文科省が図書館にはこうあってほしいという望ましい姿をこの時期に定義しているので、この作業を進めていく中で、一応そちらへの目くばりもしておきたい。別にそこに書いているからああする、こうするではないが、そういえばそのようなことが抜けていたなということがないようにするためには、一応案として出された基準、案への目配りをこれから先の的にあげていくプロセスで参考にされることもいいと思う。

●委員長

まだ、他に発言される方がおられたら、どうぞ。

このことを今日ここで決着つける必要はないと思う。今日出たご意見のうち、気づいた所だけ押さえておきましょう。まず3P目のグランドデザインの四つの目標が①～④までであるが、これは目標というより、具体的な手段に落とし込まれているのではないかという意見があった。どちらかという、もう少し抽象度を上げてよいのではないかと思う。別に変えたからといって、大きな傷になるわけでもないし、むしろICタグとか最新情報通信技術の導入ということですから、最新情報通信技術の導入により利便性の向上を追求する・・・とかそういう表現でよいのではないかな。

②・③・④は、もう少し短くして鮮明にしたほうがよいという意見が出た。

それから、「学校図書館支援コーディネーター」の説明は、本文にもどこにもないが、後ろのほうにもまた出てくる。これを全体として読んだ人は、「学校図書館支援コーディネーター」というのは、読書振興課の中に配置される正式な職員というイメージでとられるのではなかろうかと思うが、それではまた間違いがあるというのなら、ちょっと注を入れたほうがいいかもしれない。勝手に解釈される可能性もあるので。

それから、書かれてあることの中身は、とても良いことを書いてあるけれど、これだけのことを本当

にできるか、本当にやることになれば大変なことにならないか、と心配する意見もあった。ですから、この位置づけとして、「グランドデザイン」と呼んでいるからよくわからないので、「中長期方針」ということでいいのか。「行動計画」といったら、すごく縛りがキツイだろう。豊中の図書館の「中長期基本方針」で、別名「グランドデザイン」ってことになるのではないか。

●事務局

「あり方」ということで進めているので、「中長期基本方針—グランドデザイン」という方向でいけると考えている。

●委員長

それから、まだまだお気づきのことがあるかもしれない。細かいことでも、次回までに事務局までお申し出いただいて意見提起していただいたら結構だと思う。今日ちょっと言いそびれたが家に帰って思いついた、気づいたということでも構わないので、おおむね完成は次回までにしましょう。次回でオーソライズする作業に入りましょうということでしょうか。

それから一つ気になったのは、「戦略」という言葉がとげとげしいというご意見だった。

●委員

そう、悲壮感さえ感じてしまう。

●委員長

別に説得しようとするつもりはない。「戦略」という言葉は、企業でもよく使われていて、ドラッカーも使っている。だから行政系にも戦略性と言うことで、「戦略」という言葉はよく使う。これに代わる言葉があるかなと考えてみるが、なかなかない。あえて言うなら「政策」だが、ここで「政策」という言葉を使ってしまうと、図書館政策の中にまた政策が出てくるからうまくない。使ってもいいということにしたいが。

●委員

主観的な感想なので、その点は了解した。

●委員長

では、そういうことで、いったん事務局と私と副委員長との預かりとさせていただきたい。

●委員

で先ほどパワーポイントの中にも図が出てきたが、できれば図示をしてもらおうと、誰が見てもわかりやすくなると思う。文字だけで読んでいくと本当にわかりにくいので、どういう章立てで、どんな形態でということ、また考えていただいたらいいので、できたら図示して1枚でパッと見て分かるようなものにしてもらおうと、どなたが見てもわかりやすいと思う。実は、今回の資料として事前に同時にいただいた「豊中市の図書館活動」の統計資料編も全部表である。これは、誰も見ないと思う。もちろん数字

のほうがわかりやすい資料もあるので、そこは取捨選択していただけたらいいとは思いますが、ではどれをどうすべきだとは言にくいですが、数字だけ並べてただ出しているだけの統計資料になってしまうと良くないと思う。まあ表があるので、すぐにグラフ化することは可能だとは思いますが。比較をされて困る部分は数字のままにしておけばよいが、少しそのあたりを考えていただけたら、本当にいろいろな人に見てもらうためのものになると思う。

●委員長

さっきのパワーポイントと合わせて、少し見やすく図面等の処理を見やすく工夫できるのではないかな。

●委員

最初に一巡した時に、常勤職員の方と任期付短時間雇用の職員とアルバイト職員の方についての話をしたが、ほぼ半分が常勤の方という状態で、常勤職員がグループの核となる・・・となるという表を、組織としての役割分担として書かれていたと思うが、市民にとっては、この人が常勤で、この人がそうでないということは全く分からない。それをまず気をつけていただければということ。またかねてから図書館にかかわる市民活動で、市民サイドから言い続けてきたことは、ひとつの事業をするにも職員間の情報共有と、継続するということの大切さについて、何回も要望してきた。まして雇用形態が違うという中で、どうやって情報を共有し、継続を重ねていくのかということを実際に真剣に考えていただきたい。具体的に案を進めるときに、綺麗ごとではなくて、こういうところをどうするかということはかなり工夫が必要だと思うし、本来なら常勤職員のパーセンテージが上がらないといけなのに、これだけのことをするのに、むしろ下がっている時代に、このあたりの工夫が相当必要だと思う。

●委員長

それでは次の議題に入る。

お手元に配られている平成23年度「豊中市の図書館活動」の案について、事務局から説明を。

●事務局

お手元の「豊中市の図書館活動」平成23年度版（案）をご覧いただきたい。新しく図書館協議会の委員になられた方もいらっしゃるので、この「豊中市の図書館活動」について説明させていただきたい。豊中市の公共図書館における毎年度の図書館サービスについて、市民の皆様をはじめ多くの方々に広く知っていただくとともに、職員自らが分析する機会としてとらえており、広報手段としても位置付けしておりますのが、「豊中市の図書館活動」である。

この図書館活動を毎年着手の時期とか内容におきまして、市民の方にも様々なご指摘をうけ、毎年作成してまいっております。今回も大きな労力と時間がかかる作成上の負担を軽減し、効率よく作成するための見直しも行なった。本編については特に、30Pまでの分量でよりわかりやすく見やすいものにしたと目標を立て取組み、できあがってきたのがこの23年度版である。ちなみに去年できあがったものはこの倍くらいの量だった。この23年度版本編の主な特徴は、3Pに主なサービスの数値をあげている。個人貸出について取り上げると、インターネットや携帯サイトから必要な資料だけをリクエストしてカウンターで受け取るという利用方法や、来館せずに継続手続きの貸出が出来るが、それが統計上

反映されないことから、統計上はやや個人貸出の数値について減少傾向になっている。

4 P以降は、昨年一年間を振り返り、主としてお知らせしたいサービス・事業についてご報告している。内容としては、「住民生活に光をそそぐ交付金」による、「暮らしの課題解決支援サービス」、「パスファインダー・検索ナビ」を発行し情報発信していること。それから「ブックスタート事業えほんはじめまして」「とよなかブックプラネット事業」の報告、さらに「学校図書館支援ライブラリー」そして昨年度は吹田との広域利用が始まったので、そのご報告。それから「手塚治虫文庫」の開設、そして東日本大震災被災地へ行ったことのご報告などをあげている。

さらに8 Pからは「地域・市民との協働事業」の報告。その次に図書館からの情報発信、それから昨年度の主な事業報告などとなっている。今回活字の大きさや字体も変更し、見やすくするよう努めた。

昨年度1年9か所の各図書館で、公共図書館として市民へのよりよいサービスを心掛けてまいった。

統計編については、先ほどご指摘を受けたが、様々な場面で事務用で必要になる数値類ということで、例年どおりの項目・内容となっているが、今後検討していく。まだこれは案の段階で、本編のほう写真の配置につきまして、まだ検討中である。本日は「豊中市の図書館活動」につきましてご意見いただくほかに、9月の20日ごろまでにご意見いただきまして、また参考・検討にさせていただき、本編・統計編とも、もう一度最終見直しをして印刷していきたいと考えている。

●委員長

説明された「豊中市の図書館活動」(案)について、ご質問・ご意見等を伺いたい。

●委員

以前は大体45～46Pでしたから、大幅にページ数が減ったことと、記載方法が変わってある意味ではすごくアピールして読みやすいと言えると思う。ただYAとか詳しい言及がなくなっているとか、各項目とてもシンプルになっている。これをPR・情報発信の手段とするというときに、これで耐えられるかどうか、一回市民の会にもどって、皆で検討して9月20日までに是非意見を出したいと思う。

●委員

特に意見はない。

●委員

私は分量が少なくなって、読みやすくなって良かったと思う。最初のほうに1ページだけで豊中市立図書館の姿というのがコンパクトにまとめられているのは、わかりやすいのではないと思う。これがいいのかわかりはわからないのだが、ぱっと見たときに図書購入費が204円というのが多いのか、少ないのか実感がたぶん一般の人にはわかりにくいのではないと思うので、そういったところで何か平均的な比較というものがあるといいのかもしれない。これはいろんなご意見があると思うが。

●委員

大変見やすいものになっていると思う。表現的には非常にわかりやすいのでいいと思う。私が内容的に非常に気になったところは、19P「資料の収集と保存」というところなのですが、最後の方に

「野畑書庫がすでに飽和状態に達しているなか、府立図書館や他市の図書館との相互貸借制度の利用も行いつつ、豊中市立図書館の蔵書の構築・保存に努めていくことが課題である。」と書かれている。書庫が飽和状態に達しているのは大変なのかなと思い、課題であるというのは認識されているとは思いますが、ではどういう対策がなわれているのか、ピンとこないと感じた。例えば統計・資料編でいいますと、4Pの下のほうに「除籍図書内訳」とあり、廃棄のところで岡町は2579冊。これ蔵書が約23万冊ですので約1%、野畑のほうですと約2%、服部ですと約3%という形で廃棄があるようだ。私が危惧しているのは、書庫が飽和状態だと廃棄の方にまわっていかないのかなと。それはそれで豊中市民の資産消滅ということにつながるかと気になったので、何かコメントいただけたらありがたい。

●事務局

廃棄の割合等については、一応野畑書庫を含め資料は新陳代謝しており、利用頻度のあるもの・少なくなったものを絶えず検討している。基本的に廃棄に関しては、利用とともに年版等で情報が古くなったとか、他にはいわゆる汚損・破損というものが出てくるので、基本的にはそういうものについて対応している。書庫の飽和状態と、廃棄資料の数の関連は薄いと考えている。

●委員

私もふだん保護者に対して、こういうものを書いたり出したりしているのだが、保護者に聞くと、資料を見る時には、まず写真から目に入り見出しを見て、そして内容を読むという。パラパラとめくってみて、まず写真を見て、一番初めにもどってくるということがよく言われているので、写真とか見出しの文字を工夫するというのはとても大切で、必要だと思う。

●委員

ご苦労様です。一年間のまとめを組み立てていくのはとても大変で、しかも図書館がされている仕事が、本当にたくさんあるんだなと、これを見て実感している。前年の資料を年度当初にいただいているが、前回に比べると非常に見やすい。端的にわかりやすく書かれていると感じた。

平成23年度1年をふりかえってというところと、H23年度事業報告というところが、何がどう違うか、違いが分かりにくいのではないかと。何となく分かるのだが、一般の人から見て重なっているところがあるのではないかと。今回はいいと思うが、項目だてを工夫して、羅列のような形になっているところの整理をしたら、もっと読みやすいものになっていくと思う。図書館はこれだけのことをやっていますよと、市民にわかっていただけるのではないかと感じました。資料編については、先ほど言ったように、工夫がいるかなと感じた。

●委員

内容については、非常に見やすい冊子でわかりやすくまとめられているという印象がある。

●委員長

はい。大筋好評を得ているようだ。私が初めてこの委員会に関わらせていただいた頃、「豊中市の図書館活動」の中身を読んで、ちんぷんかんぷんだった。ひとつひとつ「これはどういう意味？」と聞きま

くって、後で人に聞いたら、誰が見てもわからんものやと言われ、それじゃ困るということになり、それが一つの改革の動機でもあった。歴代館長も協力していただいて、それでだんだん良くなってきている。一気呵成ではありませんが。特に印象的なのは、市民との協働に関しては全然データがなかった。せっかく子ども文庫さんが図書館に関わってがんばってくれているのに、協働事業については全く統計が出てこない。それが数年続いていたので、この委員会の意見が出たことで変わった。

つまり、ここで出された意見を反映して、どんどん良くなることに役立つから、ご心配なくどうぞ自由に意見を出していただきたい。

●委員

他の委員からも少し出ましたが、前半と後半の使い分けがハッキリしたほうがいいと思う。前半はこの1年のトピックということだ。あまりここにたくさん出ると、後半と前半がどう違うねんという話になる。例えば今市民との協働について話が出たが、8P～9Pのところは、とりわけこの1年のということでもないで、むしろ団体のリストなどは入ってこないほうが、かえって印象が良いのじゃないか。もう少し前半をしばらくこんで、この1年の豊中市立図書館を特に協調しておきたいこととした方がよいのではないか。それで全般的な去年1年の活動報告があるというほうが、メリハリははっきりするだろうと思う。それから、さっき「グランドデザイン」の中で登録率40%を60%に、という話があった。この3Pに、利用者登録率という説明があり、この説明で見ると「昭和63年以降登録・更新は実施。平成17年より有効期間5年更新処理実施中。」ということだ。今の40%というのが、どれくらいの豊中市立図書館の市民の利用度合いなのかというのは、この説明からすると、比較的近年はカードを作って5年内の人ということだ。ただ、前から持っていて更新してない人も入るだろう。5年といえば例えば大学生なら、卒業してよそへ行ってしまふこともある。5年間に一度来る人を豊中の利用者としていいのだろうか。では、なにがいいのか、共通の指標になりきっていない部分がある。多くの図書館で実質的に利用者として見るためには、1年に1度でも貸出利用をした人をもって考えるということ、全部がそうではないが、割合多いと思う。やっぱり5年間で更新をするというのをベースにすると、とにかく1度カードを作ったら、現状ではその人は利用者になっている。学生とかで、とにかくどうしても1度作らないとだめだから作ったけど、その後2度と来ていないという人も含めて40%だから、本当は40%というのは、豊中の状況からすればちょっと高すぎると思う。まあ20～25%というところぐらいか。だから目標とする60%も、年に1度きている人も60%を作ろうというのは、なかなか高いハードルだが、そこまで言っているのかどうかどうなのか。現状が40%というのが、この3Pの説明に基づくとすると、この60%というのはどうかなという感じもする。今すぐやらなくてもいいですけども、コンピューターの設定をきちっとすれば、出来ない話ではないので、年1回でも使っている人というのを登録者にするというのが、まあ今のところは常識的ではないのかと思う。ちょっとこの5年は長すぎると思う。しかも1度作った人がわざわざ返しにこない限り利用者に入っているわけだから。長すぎるのではないか。

●委員長

もうひとつだけ、もし追加できるならばということで、「図書館の数値で見る平成23年度の豊中市立図書館のすがた」で示したほうが良いのかもしれないが、全国平均はどうなのか、大阪府平均はどうな

のか、大阪府の中で豊中はどの位置にある、という市民の目から見たとき、豊中はどのレベルはどのくらいなのだとことを示したほうがいいのではないかと。決して低くはないと思うが。それで見せて、本編を読んでもらうと、もう少し理解が深まるのではないかと。要するにここで書いてある3Pの表は、がんばっているデータだと思うのだが、これだけがんばったというデータとして、もう少し打ち出してもいいのではないかと。

そうすると、ここの統計・資料編のところでも、どこかに全国平均と大阪府平均のような表が一発入っていたらいいのになと思う。ここで言っている、例えば図書購入費、蔵書数、貸出冊数、他の自治体の専任職員数、資料購入費、受け入れ冊数、専門職比率、いまでもデータとして公表しているところがあるが、それはちょっとしんどいだろうから、図書購入費・蔵書数・貸出冊数この3つぐらい、利用者登録率でもいいが、で全国平均と対比してみたらもう少しパンチ力が出るのではないかと。ちょっと工夫すれば、入れられると思う。

他にまだ追加はあるでしょうか。今いただきましたご意見をもとに、もう少し加工・工夫していただく余地が、1～2%あるかなと思うので、がんばっていただけますでしょうか。

それでは、その他について。何か事務局から報告があればどうぞ。

●事務局

本日お手元の資料にあるアンケート調査2点について、ご説明申し上げたい。こちらのほうは前回の協議会でご議論いただいた、そのご意見等をふまえて調整をしたものである。郵送による市民アンケートについては9月3日を締切として、一応回収が済んでおり、今単純集計の段階である。大体1000ぐらいの回収があったということである。また、来館者アンケートは9月から10月にかけて9館の図書館で実施する予定になっている。

●委員長

これについては、各委員の皆様からご意見はないですか。よろしいか。

●事務局

次回の協議会については、事務局としては11月開催という方向で調整させていただきたい。

外部評価検討委員会の絡みもあり、今回の「グランドデザイン」については、11月中旬くらいまでにしたいと思う。

今、ここで調整というのは少し難しそうなので、委員長と委員長代行を中心に日程を組ませていただきたい。とりあえず11月中に協議会を開催するというので、よろしくお願ひしたい。すみません。

●委員長

それでは終わらせていただく前に、私的な報告を。今日は滋賀県の県立図書館主催の公立図書館長研修に行って、そこで研修講師を務めてきた。その中身はともかくとして、もらったデータにびっくりした。滋賀県の「市町立図書館サービス力」という資料をもらったが、見ていると、すごい。滋賀県の各自治体の蔵書冊数、人口100人に対する対比で、愛荘町が1682冊でトップである。最下位が大津で、225冊ですね。豊中をこれで見ると、大津には勝っているけれども、滋賀県の中では下から2番

目か3番目。だから豊中が決して近畿圏で水準が高いと威張れる状態ではないということを認識しないとイケない。もちろん滋賀県が近畿圏ではトップクラスとわかっているが。貸出冊数も大津には勝っているけれど、下から数えたほうが早い。滋賀県の中位水準にも達していない。それくらい豊中のレベルというのは、滋賀県に置き換えたなら、高くもないというところにきているなど。

もうひとつ特徴があることを見た。それは小さな自治体ほど、充実しているということだ。大きな自治体になるほど手抜きが始まる。つまり、規模の利益を追求しようとするあまりに、合理化をしすぎて、サービス水準全体が弱ってきている。だからすべてのデータで大津が最下位である。そういうことが、ちょっと我々要注意だと思う。下から数えたほうが早いデータとして、大津の次に成績悪いのが彦根とか、守山とか、草津とかの都市部だ。反対に旧の町という名のついている所、愛荘、多賀、甲良、高島、豊郷、東近江は合併しましたかね。こういう旧町が合併してすぐはまだ威力がある。しかし、合併した自治体では、たとえば旧5町集まって5つも図書館あるとすると、5つも図書館はいらないということで、つぶされかかっている。すると、効率性・経済性は発揮できるけれども、実際に図書館としてのパワーは落ちていくということが見受けられるように見た。

豊中はこれの反対を行っていると思う。都市部の自治体であるにもかかわらず、いろんな地域に足をのばして行って、地域・コミュニティとつながった図書館ネットをつくらうとしたわけで、歴史の反対を行っているなどと思った。そのへんもこれから勉強したいなどと思って、このデータを見ている。もし、お入用だったらコピーを差し上げる。時間になったので、恒例に基づき、傍聴の方から発言ご希望の方いらっしゃったら、どうぞ。

●傍聴者

はじめに第一の案件について。文面を見たときには全くわけがわからなかったが、委員の先生方的的確なご意見で、なんとなく課題も含めていろいろ見えてきた。さすがに豊中の協議会だなどと思った。

ひとつは学校図書館の件で、「学校図書館支援コーディネーター」の話が出た。これは学校司書の支援だと受け止めたが、今豊中の学校図書館の課題というのは、長年の行政の施策で、本当にずいぶん整備された。整備とリンクして、学校現場で使うということとがリンクしてこそ、子どもたちの学びを豊かにする、授業でそれを活かしながら、子どもたちの学びを豊かにするということが、今本当に求められている、これからの課題としてどうしてもしなくてはいけないところへきている。決して学校司書の支援ではないと思うので、これはもっともっと読書振興課を中心にして、学校と関わりながら課題を一緒に見つけて、どうしたら使えるか、一人一人の先生に使い方について支援するというようなことが求められている時期なので、もう一考していただきたいと思う。

●傍聴者

ここに来て初めて、しかもざっとしか見ていない状態だが、「グランドデザイン」について一言。気になったのは、「地域連携司書」を配置し…「学校図書館支援コーディネーター」を配置し…とあるが、こうした新たな名前を付けて配置するその職員はどこから連れてくるのかということ。図書館にいる司書がそういうことを兼務する形で出ていくことになるのかと想像すると、図書館の中は大丈夫なのかと懸念する。新たにこういう支援をしますというのは大事なことですけれども、ちょっと目についた所で、人員的にも心配だなどと思った。それと、これは私見であるが、キャッチフレーズは本当に要るのかと思

った。「好“寄”心」とか、勝手に違う漢字をあてないでほしい。単語としてきちっとあるものを、無理に違う字をあてて、またそこに違う意味を含ませるというようなことが、日本語をくずしていくのではないかと思う。

●傍聴者

私は、府立中之島図書館を退職した者で、図書館協議会の運営を勉強するために傍聴した。今日の「グランドデザイン」について、四つ気になる点があったので、感じたことを発言したい。

ひとつはビジョン実施に関わる資金面について、どんなふうを考えられているのか気になる。私はビジネス支援課にいたので、ビジネス支援について、こういった市町村のことですから千里の図書館やっておられますけれども、そういった記述があまりなかったなど。府立ですとか商工会議所ですとか他部局との連携というのをもう少し書いてもいいのかなと思った。学校図書館については、いわゆるコーディネーターという形で配置されるということだが、司書教諭・学校司書・学校図書館コーディネーターの役割というのを、もう少し明確化して決めておく必要があるのではないかなと思った。あと電子書籍については、箕面でも堺でも始められているが、電子書籍は今から10年くらいしたら、当たり前なものになると思う。私も「自炊」という形で資料の電子化を1000冊くらいしたが、いわゆる野畑書庫パンク状態ということについては、こういった形で電子化すれば保存というのも劇的に変わってくると思う。グランドデザインですからこういった形でぼかしておくのが良いかと思う。それと最後になるのですが「豊中市の図書館活動」の公開については、前年度の実績なのでやはり夏ぐらいまでに公開される形にされたらいかがか。実は府立中央はアップしていませんけれども、中之島のほうは8月にアップした。大変失礼だが、せっかくやってきたことですから、さっさと載せられることは、そのほうがよいと思う。今日は図書館評議会の参加させていただいて、豊中の図書館評価の内容は非常に良いと聞いていたので、本当に参加してすごくレベルの高い協議会だと思った。

●委員長

それでは終らせていただいてよろしいか。貴重なご意見ありがとうございました。